

がん検診の 賢い受け方

がん検診の
メリット・デメリットを
知っていますか？



2023年3月 第1版

5つのがん検診で 死亡のリスクを 下げられる

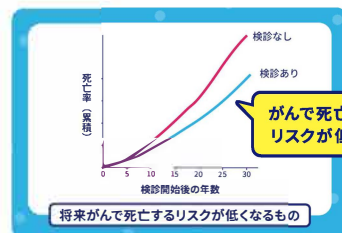


がん検診は、正しく理解して受けることで、
がんが死亡するリスクを下げることができます。
世の中には色々ながん検診がありますが、

国が推奨しているのはこの5つのがん検診です。



5つのがん検診を正しく受診すると、
将来がんで死亡するリスクは確実に下がります。

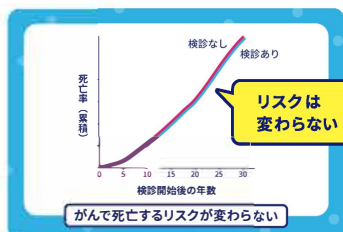


お奨め できない がん検診とは？



では、お奨めできる5つのがん検診以外のがん検診は、
なぜ国から推奨されていないのでしょうか。
それは、その他のがん検診では、

**受けても受けなくても、
将来がんで死亡するリスクが変わらないためです。**



また効果が多少
あったとしても小さく、
**デメリットが大きい検診も
推奨されません。**



では、がん検診のデメリットとはどういったものがあるのでしょうか。
**がん検診のメリットとデメリットには
このようなものがあります。**

がん検診の メリット



**がんを早期に見出し、
死亡リスクを下げること**

がんを早期に見出し、治療を始めることで、
がんが死亡するリスクを小さくできることです。

例えば

大腸がん検診を受けたひとの死亡リスクは、
受診しなかったひとに比べて、**半分以下**になります。



**がん検診の
賢い受け方**

がん検診の

デメリット



☑ 検査の偶発症

検査に伴って生じてしまうトラブルで、偶発症と呼ばれるものです。
がんの精密検査で、出血などが起こり、入院が必要になることがあります。

☑ 検診結果の誤り

多くの場合、がん検診の結果は正しいのですが、一定の割合で検診の結果には必ず誤りが生じます。検診結果の誤りには「偽陽性」と「偽陰性」の2種類があります。

偽陽性

偽陽性とは、検診結果では「がんの疑い」だったのに、精密検査を受けてがんではなかった場合のことです。

※対象者の年齢やがんの部位にもよりますが、「がんの疑い」となる割合は2~10%で、そのうち90%以上はがんではありません。

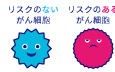
偽陰性

偽陰性とは、検診結果では「異常なし」だったのに、その後症状が出てがんと診断される場合のことです。

※対象者の年齢やがんの部位にもよりますが、がんと診断される割合は「異常なし」のうちの1000人に1人(0.1%)程度です。

☑ 過剰診断

がんと言っても放っておいても症状がなく死にも繋がらないリスクのないがんと、放っておくと死につながるリスクのあるがんの2種類があります。
過剰診断とは、その死亡リスクのないがんを見つけてしまうことです。
がん検診でリスクのないがんを見つけてしまうと、メリットがないのに大きな手術や抗がん剤の治療が必要になります。しかも、治療をしたとしても、寿命は伸びません。



こうしたデメリットがあるのを知ること、あなたも賢くがん検診を受けられるようになります。



がん検診で推奨される「受診年齢」と「頻度」



がん検診を受けるときには、年齢や頻度についても注意しましょう。

がん検診が有効だとわかっているのは、特定の年齢層の人だけです。がん検診を必要以上に頻繁に受けても、がんで死亡するリスクは低くはなりません。それどころか、偽陽性などのデメリットが確実に増えます。



こちらが、国が推奨しているがん検診です。この年齢と頻度で受診すると、がん検診のメリットは大きくなり、デメリットは小さくて済みます。これ以外のがん検診は、医師と相談の上、ご自身で判断してください。

胃がん 50歳以上 2年に1回 (エックス線検査または内視鏡)	大腸がん 40歳以上 毎年 (便潜血検査)	肺がん 40歳以上 毎年 (エックス線検査)
乳がん 40歳以上 2年に1回 (マンモグラフィ検査)	子宮頸がん 20歳以上 2年に1回 (細胞診検査)	

※2021年3月時点

がん検診の4つの注意事項



1

まず、すでに気になる症状がある人は、がん検診を受けるのではなく、すぐに医療機関を受診してください。



すぐに医療機関を受診

2

次に、がん検診の結果、精密検査が必要だと言われた場合は、必ず、すぐに医療機関で精密検査を受けてください。その際には検診結果をお持ちください。



すぐに医療機関で精密検査を受けること

3

がん検診で、異常なしと言われても、一度でもやめずに、定期的ながん検診を受けてください。2年後、3年後に発生するがんを見つけるためです。



定期的ながん検診を受けること

4

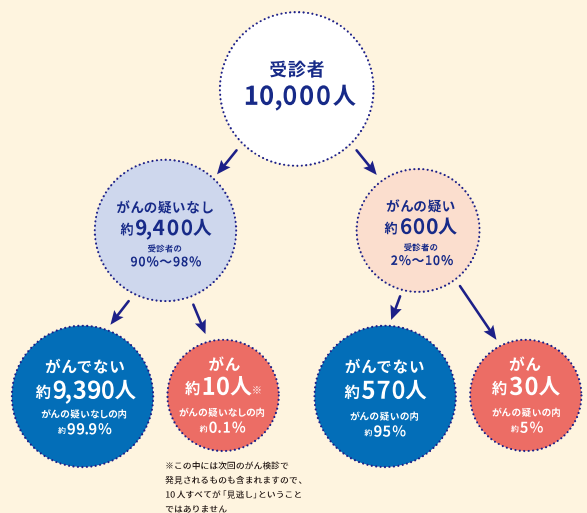
検診結果に異常がなくても、がん検診の後に何らかの症状が現れたら、次の検診まで待たずに、すぐに医療機関を受診してください。



症状が現れたらすぐに医療機関へ

10,000人の受診者の内訳

これらの値は参考値であり、対象部位・検査方法や、受診者の性・年齢によって異なります。



制作・監修:

厚生労働科学研究費補助金 (がん対策推進総合研究事業)

「がん検診の利益・不利益等の適切な情報提供の方法の確立に資する研究」班 (研究代表者: 斎藤 博)

こちらのWeb サイトでは、がん検診に関する全国の実施状況データ、専門家向けのe-ラーニング、受診者への説明動画などの役立つ情報をご紹介します。

<https://gankenshin.jp>

